

て、その目の一つ一つを、あなたの目からおちる、ダイヤの一つ一つを、紅い糸で
繋いで、頸にかけて、都のアスファルトの上を歩くでせうに、

あゝ、白い孔雀の輝しい目よ！
世界中で一番貴い私のダイヤよ！

灯の街へ

五月の末の曇り日であつた。鉛色の黄昏が都の大通りから小さい横町まで同じ様に
流れた。

脊の高い木の梢には可なり強い風が吹いてゐた、いふし銀の様な裏葉が片明りの
中に光る。今丁度風上の方が明るくなつた、裏葉は小魚の腹の様に白く輝く。

屋根と屋根との重なり合つた路次ではそこ、に勝手口の戸があいて、不整頓な
臺所が見える。夕暮れの雑音が路次から路次へ流れてゆく。本通りでは灯をつけた
電車が通る。

その度にはの暗い路次で今日の最後の仕事をして居る人々の心をせき立てる。齒
入れ屋は爛れた眼をしばたゝいて、口をゆがめて、明るい通りを向いて鉋を使つて
居る、羅宇屋の車がゆく、花屋の車がゆく、砂利を入れたばかりの道を車は勢よく
走る。黄色のエスコージャと白いマーガレットとピンクのカーネーションとがもつ
れあつて、脊の高い燕草は孔雀草の脇で小さな紫や白や空色の花を痙攣的に慄はし
て居る、私は思ひ返して再び本通りへ向つた。灯にぬれたそれ等の花を見よう爲め
に。湯上りの素足のころよさに。

さらでだに灯さもし時の都大路は私の心をよろこばせた。忙しい人、閑な人、疲れ
た人、緊張した人、貧しい人、富める人、男も女も同じ様に我がもの思つて歩い
てをる自由の國よ！、平民主義者の手近な樂園よ！。

二 右手の狭い路次から目の前に現れた二つの影、それは二間とははなれて居らなかつた。
襪褌に包まれた、男は女の手を引いてゆく、引きずられゆく女の手は細く骨ばつてゐた。
恐らく盲であらう。おゝその長く亂した髪よ、それに最後の香油のしたたりが落ちてから幾年になる

のであらうか。彼等が最後の食物にありついてから今日は幾日目であらうか。傷ましくもまた強いものは生きてゆく力である。「死それ自身も人間の廢墟に残された此生ほどに神秘的ではない」といふ語を思ひ出す。二人は私の前にたつて灯の方へゆく。二人の姿は二間さなほの暗さで男は何か望あるものの如く。女はありたけの方で男の手を握りながらも猶そのはなさるるを怖るゝものの如く。

「男は何か望あるものの如く。女のありたけの方で男の手を握りながらも猶そのはなさるるを怖るゝものの如く。」

小 さ き 愛

人の世に人と生れて生きながら我なほ人を愛しえであり。途に我愛しえぬてふものならば愛せであらむされど淋しや。我が愛は小さな愛一日に幾度となくうつりかはります。我が胸に張りみつる愛この愛のどこしへにあれ生きのしるしに。わが心にくみてふものいづこにもなしといひ得ぬこの淋しさよ。こゝろにもなき事をいひ心にもなき笑みをせしあとの淋しさ。思ふこと語り合ひにし嬉しさに早やつづきくるこの淋しさよ。淋しさはうれしきものよこの心たえむ日いかに淋しからまし。淋しさをせめてやらむと父母の名もよびて見ぬゆく春の宵。